外聽道有生異物ニ就テ

Mikio Yamasaki: Über 3 Fälle von lebenden Fremdkörpern
(insekten) im äusseren Gehörgang.

米子博愛病院耳鼻科

醫學士 山崎 幹夫

一、緒言

吾々人間ノ外聽道ハ一般動物ノ夫レニ比シ外界ヨリノ異物侵入、或ハ又迷入ニ對シソノ防禦器官ノ著シク劣レル事ハ動物ノアルモノニ觀ル耳翼運動ノ自在、耳翼ノ下垂、耳珠ノ形態、外聽道ニ於ケル短毛ノ密生等ヨリシテ一層ソノ感ヲ深クスルモノナリ。斯クノ如ク吾人外聽道ハ異物介在ニ比較的容易ナル條件ノ下ニアルモノナレバ、苟クモ之ガ口徑ト殆ド同等ナル若クハソレ以下ノ小ナル時ニアリテハ天地間ノ物悉ク異物トシテ外聽道ニ介在シ得ルモノナリ。然ル時ハソノ種類洵ニ千差萬別ソノ範圍實ニ廣大無邊ト謂フ可ク敢テ之ヲ大別シテ無生物ト有生物トナス。然リ而シテ無生物ガ異物トシテ來ルハ吾人ノ最モ多ク日常遭遇スル所ナルタメソノ種類タルヤ又著シク多數ヲ極メ到底盡シ得ズト雖モ大別シテ液體、固體トナシ更ニ植物性、礦物性、動物性ニ分類シテ太過ナカラント信ズルナリ。液體ハ鼓膜ニ穿孔ヲ認メザル時多クノ場合流出シ蒸散シ或ハ吸收サルモ耳垢貯留ノ存シテコレヲ吸收シ濕潤性トナルコトアリ。無生異物ハ日常生活上最モ吾々ノ手近ニ存在スルアラユル物品例セバ紙、綿、小兒玩具ノ小片、耳搔キニ使用スル燐寸ノ軸木、或ハ果實及ビ草花ノ種子、穀物ノ類等植物性ノモノソノ大多數ヲ占ム。礦物性異物ハ各種鑛石、砂、石筆ノ小片、金屬製品或ハ霰彈等、動物性トシテハ骨小片、毛、齒牙、小動物ノ糞或ハ種々ナル組織片等ニシテ、之等無生異物ニ比シ有生異物ハ偶然ノ機會ニ遭遇シ得ルノミニテ寔ニ僅少、而モ殆ド昆蟲ノ範圍ヲ出デズ異物トシテソノ最モ尠キモノトス可キ乎。

余ハ茲ニ吾ガ臨牀ニ於テ最近遭遇セシ有生異物ノ三症例ニ就テ簡單ニソノ經過ヲ述ベ併セテ比較的鮮少ナル此種異物ノ文獻ヲ探ネ以テ之等先賢諸氏ノ跡ニ追加セントスルモノナリ。

二、文獻

原著 山崎ニ外聽道有生異物ニ就テ

外聽道内有生異物ハ都市ヨリモ寧ロ地方ニ於テハ偶々ノ機會ニ遭遇シ敢テ珍奇トナスニ非ザルコトハ既ニ前述ノ如クナルモ之ガ文献ニ至リテハ、其數多キト云フ程ニアラズシテ寧ロ鮮少ナリ、依テ余ハ小範圍ナリシモノノ涉獵シ得タルモノ、大略ヲ最近ノモノヨリ極メテ簡單ニ拔萃センニ。

大熊隆三氏ハ外聽道有生異物ノ一例トシテ蛆ノ例ヲ報告サル、即チ患者ハ二十三歳ノ職工、作業中全身熱湯火傷ニテ入院、ソノ後一週間ニシテ左耳内ノ疼痛並ニ耳閉感ノ主訴アリタルニ依リ診察スルニ繊細ナル蛆十一匹ヲ耳洗ニヨリテ除去シ得タリト、從來ヨリ耳疾無キ事ヨリシテ繃帶交換時家蠅ノ飛來、産卵セルモノ、孵化シタルモノナラント。

國安竹次郎氏モ同様稀有ナル外聽道異物(蛆)ノ一例トシテ五十歳ノ男子(農)。ハ本年八月右側耳痛ニ對シ糞汁ノ注入ハ著效アリトノ迷心ニ據リ之ヲ行ヒシ所、二日後耳内蠢動感アリトテ來ル、精檢ノ上徐ロニ是ヲ摘出シタルニ○・五糧ノ蛆ナリシト云フ。

石井俊次氏モ外聽道有生異物二例ト題シ(第一例)三歳ノ女兒(農)。右側ノ耳痛耳漏ノ主訴ニテ來レルニヨリ診ス。即チ入口部ヨリ約一糧ノ内方ニテ蠢動セル異物ニテ閉塞サレオルヲ見タルニヨリ更ニ精檢摘出セシ結果蛆六匹ヲ發見セリト。(第二例)三歳ノ女兒(農)。中耳炎ノ膿ヲ慕ヒテ耳内ニ斃死セル二匹ノ家蠅ヲ報告セリ。明治四十四年ノ發行ニ係ル廣瀨涉氏著書「耳鼻咽喉科診療指針」ヲ繙クニ耳漏ノ蓄積ニヨリ蛆ノ生ジ異物トナルノ記載ハ泰西文献ニ屢々之ヲ見ルモ、余ハ未ダ本邦文献ニ之ヲ見ズトアルヲミテモ前記文献ガ蛆發生ニ關スルソノ間ノ消息ヲ瞭ニシ合セテコレ以前ニハ本邦文献ニ此種ノモノハ觀ラレザリシ事ヲ鮮明ニセルモノ、如シ。

貝田好美氏ハ外聽道有生異物ニ就テ及症例追加トシテ九大附屬醫院附添廿五歳ノ女子、茶羽「ゴキブリ」(*Thyblodionia germania* Steph.)ト稱スル「ゴキブリ科」ニ屬スル所謂油蟲「長サ一・三糧、幅○・四糧」ナル昆蟲ニ就キテ報告セリ。患者ハ深夜左耳ノ耳鳴ニヨリテ覺醒シタルモ平素周圍ニ該油蟲ノ遊翔スルヲ見居タルタメ是ノ入リタル豫感アリタリト云フ、即チ「オリーブ油」ノ點耳ニヨリテ先ヅ殺シ、而シテ後「ビンセツト」ニテ摘出セリト。

岩田、吉井共著「近世耳鼻咽喉科學」ニ於テモ外聽道異物ノ章ニ十日間晝夜煩ハシキ耳鳴ニ惱メル一患者ノ鼓膜面ニ一小蜘蛛ノ匍匐シツ、アルヲ認メ、ヨツテ是ヲ除去セルニ苦痛頓ニ去リシヲ記載シ居レリ。

大杉章喜氏ハ大正十二年十一月ノ治療藥報ニ同年六月下旬、五十五歳ノ男子ノ左側外聽道内ノ蝶、同年五月下旬ニハ十六歳ノ男子ニ右側外聽道内ノ蠅、大正十一年盛夏、中年ノ男子左側耳内ニ於テ長サ約二寸ノ小百足蟲ニ就テノ報告アリ。

加藤直吉氏ハ外聽道異物(便所ノ蛆)ノ一例ト題シ、生後六日目ノ乳兒ノ耳内ニ於テ長サ約一・五糧、幅○・五耗ノ蛆ノ異物ヲ述ベ。

内田徒志氏ハ二ケ年以上停留シタル外聽道動物性異物ノ一例トシテ支那天津居住五十六歳ノ希臘人男子、一八一五年六月中旬一匹ノ家蠅左耳内ニ迷入劇烈ナル疼痛騒鳴ニ堪フル能ハズシテ、二、三醫ノ門ヲ叩ケド除去不能ナリシタメト日ヲ經ルニ從ヒ苦痛輕快セルタメトニヨリ二ケ年餘放任ス、偶々氏ノ見ル所トナリ異物鉤ヲ送入徐々ニ牽引シテ容易ニ摘出セリト、即チ中等大ノ蠅ノ屍體ニテ而モ變色ナク羽兩脚共ニ完備シ得タリト云フ。

三島清市氏ハ大正六年四月軍醫國雜誌上ニ蠅ノ外聽道異物一例ヲ報告シ。

國司安次郎氏ハ氏ガ開業ノ翌晩(大正十四年七月)遭遇セシ一例ニシテ五十三歳ノ鐵道官吏、町晧片ヲ越ヘテ鼓膜面ニ接スル迄ノ深部ニ侵入シ來レル蚊ノ二倍大ノ昆蟲ニ關シ詳述シ、尙ホ、

片岡舜治氏ハ「デガ」ト稱スル昆蟲(長サ約一仙米 幅〇・五仙米丸クシテ黒ク硬シ)ノ哇呼ニ遊ブ小兒ノ外聽道ニ入レルヲ、

山根銈氏ハ乳兒外聽道内ノ有生異物トシテ昆蟲「ダニ」ヲ銳匙ニテ搔爬除去セシ事アリ。

上野昂氏ハ(第一例)四十歳ノ農夫ノ耳内ニ黃金蟲ノ迷入ニヨリ動搖毎ニ劇痛生ジ、遂ニ失神スルニ至レルモノ及ビ(第二例)三歳ノ小兒、外聽道膿中ニ在リシ家蠅ノ除去困難ナリシ例ヲ告ゲ、

平川武三郎氏ハ外聽道有生異物ト題シ、大正五年二月九大耳鼻科ニアリシ時、貝田氏ト同様「ゴキブリ科」ニ屬スル一昆蟲ニ關スル症例報告アリ。即チ患者ハ二十六歳ノ男子、睡眠中俄然右耳ニ劇痛ヲ發シ來レル爲、夜ノ明クルヲ俟チテ診察ヲ受ケタリ。該昆蟲ハ長サ約一・〇仙米 幅約〇・四仙米ノ屍體ナリキ、氏ハ内外ヲ通ジ、文献ニ現ハレタル有生異物ハ僅カ七例ニ過ギズト記セルヲ觀ルモ如何ニ此種文献ノ僅少ナルカラ識ルニ充分ナリ。

阿部正智氏ハ大日本耳鼻咽喉科會報第十八卷ニ黃金蟲ノ耳内ニ迷入セル十一歳ノ少女ニ遭遇セシ經驗ヲ詳細ニ互リ報ジ、ソノ他小林立雄氏ハ外聽道ニ棲居セシ「ハヘトリグモ」ノ一例(濟生學舍醫事新報一〇六號)ヲ、藤信夫氏ハ羽蟻及衣虱(同上二一〇號)ヲ、山浦貞三氏ハ蚤(醫事新聞六四三號)ヲ Blackwell ハ「テキサス」虱(Texas Ixus)ヲ Dunn 扁虱(Ixodes)ハ Kompanejeitz ハ蠅ノ蛆ヲ、Zelbrowski ハ羊牧場ノ蠅ノ幼蟲(Sarcophago)ノ五例ヲ報告シ居レリ。

三、余ノ症例

症例第一。(家蠅)。榎〇晴〇、女兒、八歳(農)。
主訴。右側耳漏、診斷、右側急性中耳化膿症並ニ口蓋扁桃腺肥大症。初診。昭和四年二月二日。所見。外聽道ハ膿ヲ以テ汚レ、鼓膜面ニ膊

動性ヲ認ムル穿孔アリ。兩側口蓋扁桃腺ハ著シク腫脹ス。左耳ニ何等ノ病變ヲ認メズ。數日外來ニテ通ヒタルニ膿殆ド消退シタルタメ、母親道遠キノ故ヲ以テソノ後ハ來ラザリシナリ。七月某日再來、耳漏再ビ出デタリト、檢スルニ右側外聽道ハ粘稠ナル膿ニテ充滿シ、且ツ一種ノ臭氣ヲ有セリ。尙ホヨク檢スルニ稍々深部ニテ黒色ノ異物膿汁ノ表面ニアルヲ認メタリ。依ツテ綿棒、「オキシフル」ニテ清淨ニナシタルニ、ソノ泡沫ニ混ジテ家蠅ノ溺屍體出デ來レリ。

症例第二(蜂ノ一種)。佐〇〇、十九歳ノ男子(學生)。患者ハ生來耳疾ナク體格榮養共ニ可、本年八月廿二日列車中車窓ニ接シテ坐ヲ占メ居リシ所、急ニ烈風ニ煽ラレタル一匹ノ昆蟲ハ計ラズモ右側外聽道内ニ突入シ來レリト。即チ右側耳ノ強度ノ疼痛、騒鳴、熱感ノタメ直チニ地方醫師ノ處置ヲ受ケ、耳洗、異物鉤等種々手ヲ盡クスモ除去出來ズ、苦痛益々増強スルニヨリ遂ニ之等操作ハ中止ノ止ムナキニ至リ患者日ヲ改メテ余ノ診ヲ求メシナリ。騒鳴今ハ輕減シタレド疼痛、熱感、異物感、難聽ニテ寔ニ不快ナリト云フ。即チ檢スルニ鼓膜面ニ接シ、所謂外聽道竇内ニ於テ黒褐色ノ町瞤ノ如キ一塊ヲ認メシニヨリ徐ロニ耳ノ銳匙鉗子、「ピンセット」ニテ摘出シ見レバ昆蟲ノ尾部ナリシナリ。更ニ精檢ノ上頭部脚部及ビ翼ノ凡テヲ摘出シ得タレバ之等ヲ組ミ合セタルニ、即チ蜂ノ一種(約一・五糎)ナリキ。鼓膜ニ輕度ノ充血ヲ呈セル外何等ノ變化ヲ認メズ。外聽道周壁ニテハ、前日ノ操作ノタメニ生ゼル僅少ナル損傷及ビ充血ヲ認ム、聽力ハ頓ニ回復セリ。

症例第三(黃金蟲)。倉〇準、五歳ノ男子(農)。

主訴。七、八日前ヨリ右側鼻腔ヨリ惡臭ヲ有ス鼻汁ノ過多、鼻翼ヨリノ壓痛アリ。初診。十月四日、左側耳ノ難聽ヲモ發見セリ。檢スルニ鼻腔前庭並ニ入口部ハ糜爛ヲ呈シ、惡臭ヲ有ス膿ニテ鼻腔全ク閉塞ス。余ヲシテ直チニ異物ヲ想起セシメタルニヨリ充分ノ注意ヲ以テ先ヅ膿ヲ拭ヒ去リ視ルニ更ニ粘稠ナル膿汁塊ノ鼻腔ヲ閉鎖スルヲ見ル、據ツテ「ピンセット」ニテ徐々ニ摘出シ得タルハ束ネタル紙片ナリキ。是ヲ町瞤ニ擴ゲ檢セバ新聞紙中ニ挿入シアル活動映畫ノ廣告片ナリ、長サ約五糎、幅三糎ノ綠色紙片ノ上ニ紫色ニテ印刷シアル「太秦大超特作品」ソノ他ノ數字廢ニ讀マル。

尙ホ左側外聽道ヲ檢スルニ黒色ノ異物深部ヲ全ク閉鎖スルヲ發見セシタメ、患者ノ親ニ正シタル所、十日前耳掃除ニ際シ昆蟲ノ脚ノ出デシ事アリ、不可思議トナシタレド苦痛ナキ事ナレバソノ儘放任シアリタリト云フ。精檢スルニ昆蟲ナリ。頭部ヲ深部鼓膜面ニツケ、尾部ヲ外方ニ向ケオレリ、先ヅ耳洗ヲ試ミタレド不成功ニ終リタルニヨリ異物鉤ヲ使用セシニ容易ニ摘出スル事ヲ得タリ、觀レバ即チ黃金蟲(長サ一・二糎、幅〇・五糎)ナリキ。

以上余ガ遭遇シタル三症例ニ就テ按ズルニ、症例第一ハ八歳ノ女兒ノ右耳内ノ家蠅ニシテ、本例ニ關シテハ既ニ三島清市、大杉章喜、内田徒志、上野昂ノ諸氏ノ報告アリ。本患者ハ一度疾病輕快セルタメ、病院ニ連レ來ルノ繁ニ堪ヘズ。爾來放任シ置キタルニ再ビ臭氣ヲ帶ベル膿ノ流出シ來レルニ依リ訪レシモノナリ。コハ即チ盛夏ノ候ナリシタメ患者晝寢ヲ食リシ折、家蠅ノ耳膿臭氣ヲ慕ヒテ外聽道内ニ誘惑サレ遂ニ粘稠ナル膿中ニ脚ヲトラレ死ニ至リタルモノナラン。患者ノ惡臭、難聽等ヲ主訴トシテ來院セルコトノ速カナリシト蠅ノ屍體尙ホ極メテ新鮮ナリシヨリシテ一兩日ヲ出デザリシモノタルヲ思惟スルナリ。

症例第二ハ十九歳ノ男子ノ耳内ニ迷入セル蜂ノ一種ニシテ、此例ニ關シテハ成書ノ記載アル所ナルモ未ダソノ文獻ニ現ハレタルヲ見ズ、本例ニアリテハ患者汽車旅行中、列車窓外ヨリ烈風ニ煽ラレ全ク遇然ニ患者ノ耳翼ニ強く衝突シタル際遁路ヲ失ヒ瞬時ノ避難場所トシテ外聽道奥深く突入ヲ餘儀ナクサレシ一例ナリ。

又、症例第三ノ患者ハ五歳ノ小兒ニシテ鼻腔内ト耳内トニ同時ニ異物ヲ有ス寔ニ稀有ナル例ニシテ、鼻腔内異物トシテノ廣告用印刷物ハ恐ラク以前ヨリノ鼻汁過多アリシ爲ニ自ラ束ネテ挿入シタルモノナランモ、小兒ノ事トテ日ノ經ルニ從ヒテ全ク忘レ果テシモノナラン。耳内異物トシテノ黃金蟲ニ關シテハ上野、阿部兩氏ノ報告アリ。余ノ場合ハ既ニ旬日モ前ヨリ迷入シ居リシモノニテ完全ニ外聽道ヲ閉鎖シオリタリ。カ、ル大ナル昆蟲ノ侵入シタル際ニハ上野氏ノ場合ノ如ク劇痛ノ爲メ失神ト迄ハ行カナクトモ號泣シタルナランハ明瞭ナルモ、小兒ノ事故ヨク泣ク事頻リナレバ母モ氣付カザリシト云フ。

附五、處置

外聽道有生異物ノ際ニ於ケル處置ハ檢者ノ之ニ遭遇セシ機會ノ遲速ニヨリ尙ホ生命ヲ保チテ耳内ニ蠢動苦悶決死的躍動ヲ試ミオール場合ト既ニ屍體トナリテ存スル場合トアリ。或ハ又耳内ヲ全ク閉鎖シテ寸隙スラ求ムル能ハザル場合ト然ラザル場合トアリ。然シ執レノ場合ニアリテモ有生物ガ外聽道ヨリ著シク小ナル時、ソノ效ヲ奏スルコトノ最モ屢々ニシテ且ツ最モ安全ナルハ耳洗滌ニシテ Denker ハ異物一〇〇例中九五、Zaufal ハ一〇九ノ異物中九二ハ此法ニヨリテ充分除去シ得ルモノナルヲ統計上ヨリ示セル程ニテ、即チ洗滌液ノ逆流ヲ利用シテ異物ヲ除去スルノ法ナリ。次ニ又「オキシフル」ニテ泡沫ヲ生ゼシメ是レノ利用ニヨリ摘出シ得ルハ吾人ノ日常ヨク經驗スル所ナリ。反之、耳内ニ尙ホ躍動シ患者ヲ苦メル事甚ダシキモノニ至ツテハ耳洗滌ニ先キ立チ微加温セル阿列布油、「グリセリン」時ニハ「クロ、ホルム」、「クロールエチール」、「コカイン」等ノ點耳ニヨリテ死ニ至ラシメ、而シテ後ニ以上ノ操作ヲ施スコトヲ可トス。一見直チニ鑷子ヲ取リテ是ヲ摘出セント試ムルハ洵ニ不可ニシテ異物ヲシテ却ツテ深部ニ送入シ、患者ノ苦痛ヲ更ニ増大スルノ愚ヲ致スハ往々ニシテ見ル所ナ

レバ充分注意スベキモノト思惟ス。又全ク耳内ヲ閉塞シオレル場合、或ハ又既ニ一、三他醫ヲ訪レタル後吾々専門醫ノ許ニ診ヲ求メタル場合等ニアタリテハ洗滌法ノミニテハ到底除去不能ノ事多キモノナレバ、此際異物鉤或ハ鑷子或ハ耳ノ鉤鉗鉗子等ヲ持シ、必要ニ應ジテハ麻酔ノ下ニ周壁ヲ損傷セザルヤウ周到ナル注意ヲ以テ臨ミ精檢ノ上、熟練ト本邦人ノ所謂「手ノ器用」ヲ利用シテ徐ニ摘出スベキナリ。(完)

文 献

- 1) 大熊隆三. 耳鼻咽喉科. 第二卷, 第三號. 2) 國安竹次郎. 耳鼻咽喉科. 第一卷, 第二號. 3) 石井俊次. 耳鼻咽喉科. 第一卷, 第一號. 4) 貝田好美. 九大醫報. 第一卷, 第三號. 5) 岩田 吉井. 共著. 近世耳鼻咽喉科學. (第十一版). 6) 大杉章喜. 治療藥報. 第二百二十一號. 7) 加藤直吉. 治療及處方. 第三卷, 第三十三號. 8) 内田徳志. 實驗醫報. 第五十九號. 9) 三島清市. 軍醫國雜誌. 第六十八號. 大正六年四月. 10) 國司安次郎. 實驗醫報. 第二年, 大正五年八月. 11) 片岡舜治. 實驗醫報. 第二年, 大正五年八月. 12) 山根健. 實驗醫報. 第二年, 大正五年八月. 13) 上野昂. 實驗醫報. 第二年, 大正五年八月. 14) 平川武三郎. 實驗醫報. 第廿二號. 大正五年七月. 15) 阿部正智. 大日本耳鼻咽喉科會雜誌. 第十八卷, 第廿一號. 16) 廣瀬涉. 耳鼻咽喉科診療指針 (明治四十四年發行). 17) Denker u. Brünings. Lehrbuch des Krankheiten des Ohres u. der Luftwege. 18) O. Körner. Lehrbuch der Ohren-, Nasen- u. Kehlkopf-Krankheiten.